

---

# Fate OF XILLIA

ユーリ・ローウェル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

F a t e   O F   X I L L I A

### 【Nコード】

N 2 4 8 2 Y

### 【作者名】

ユーリ・ローウエル

### 【あらすじ】

ガイアスとの戦い後、仲間達の前から姿を消したミラ。ミラはその後、四大精霊に匹敵する精霊の力を感じてそこに向かう。だが、その途中精霊と歯また違う大きな力を見つけたが、次に気づいた時は土蔵の中にいた…

これはF a t e / s t a y n i g h t と テ イ ル ズ オ ブ エ ク シ リ ア の ク ロ ス 小 説 で す 。

## 能力設定（前書き）

前に書いていたのを間違えて消してしまったので改めて投稿しました。それに伴い内容を少し変えさせていただきました。

最初はミラとセイバーの設定です。この設定は後々更新していきます。

## 能力設定

〔能力〕

ミラ・マクスウェル

クラス・セイバー

マスター・衛宮士郎

性別・女性

属性・火・風・土・水・光

筋力C

耐久D

敏捷D

魔力A

幸運C

クラス別能力

#### 四大精霊

ミラが生まれた時から共に居る四つの精霊、そのどれもが大精霊であり一つ一つの力が世界に影響を与えるほど。

#### 魔技

本来、召霊術には詠唱が必要だが。ミラは詠唱なしでも術を使える、ただし、その場合術のランクが一つ下がる。

#### 剣技

ミラ自身、最初はまったく不慣れであったがアルヴィンとの稽古で様になり、強敵と戦って行く内にいつの間にか剣の技量が高くなる。技は旅の直後なので全て使える状態。

#### 共鳴

ミラが元の場合、二人で敵を挟んだ時相手の動きを封じるバインドを発生させることが出来る。

その他にも共鳴をしている時、技を同時に繰り出すと強力な技に昇華する。

#### 宝具

ランク・なし

ミラは英雄と言う訳ではないのでそう言ったものは持っていない。  
ちなみに装備しているのはフェアソード。

#### 秘奥義EX

ミラが四大精霊を同時に扱う技。この技は実際、周りに被害をもたらすため余り多様は出来ない。

補足・ミラは死んでいないためマスターである士郎から魔力供給を必要しない。

もう一人の白いセイバー

クラス・セイバー

マスター・衛宮士郎

性別・女性

属性・風・雷・光

筋力B

耐久C

敏捷C

魔力B

宝具B

幸運A

クラス別能力

魔力遮断A

神秘の力で守られている鎧の加護で大抵の術では傷一つつかない

宝具

??????

真の宝具

セイバー自身、まだ手にしていないがいずれは手にする物。

本来のセイバーはまだまだ能力が上なのだが、衛宮士郎は半人前な  
せいで能力がダウンしている。

能力設定（後書き）

次回から本編です



## 第一戦・始まり（前書き）

前にはなかったプロローグ的なものです。

## 第一戦・始まり

私はマクスウェルとしての使命を果たした

だが、それは私一人では成し得なかっただろう

そう、私には心強い仲間がいた。だから私は最後まで歩けただろう

皆、私は少しの間私はいなくなるが心配する

私はいつか必ずお前達の元に帰るさ

だが、私にもやる事が出来た

それが終わったら私はお前達に会いに行こう

私はジュート達との旅を思い出しながら目を閉じる、すると何かの

力を感じた。

「これは…精霊、しかもこの力…四大精霊並のちから…」

強い力を感じた私はそちらの方に意識を向けると、その途中私は何かを感じる。

四大とはまた違う強力な力をもつ何かがあった。

「あれは…」

だが私は次の瞬間、何かに引っ張られるような感じが襲う。

「くっ…あれは…」

私は何とかしてそれに手を伸ばそうとするが…

「おいおい、まだこれは完成してねえんだよ。悪いな…」

体中模様だらけの男に私は体を押され、そのまま私は引っ張られて

行く  
⋮

## 第一戦・始まり（後書き）

次から本編に入ります。ところでこれはどのルートに向かうかまだ決まっていないんです。セイバーか遠坂、はたまた漫画のようにするか。今考えている途中です。

## 第二戦・出会い（前書き）

本編の始まりです。前とあまり変わりませんが、土郎視点ですのでほんの少し変えています。

## 第二戦・出会い

（衛宮士郎）

一月のある日、ここはとある県にある冬木市。今俺はある場面に出くわし一回心臓を刺された筈だった。

だが、何故か俺は生きていて家に帰りさっきの出来事を思い浮かべていたら何か嫌な予感がすると、先ほど俺を刺した青タイツの男がそこにいた。

その後、青タイツの男は俺を再び殺そうと槍で突くが、俺は近くにあった鉄のポスターを強化して青タイツの男の槍を弾く。

「ほう…魔術師の割には中々面白い事をするじゃねか…だが…！」

俺は男のとても人間が出せるようではない威力の蹴りを腹にくらい、離れている土蔵のドアに叩きつけられる。

「がはあ……」

あまりの威力に俺は一瞬呼吸が止まり、次には息を思いっきり切り切らしていた。それでも俺は這いつくばって土蔵の中に入る。

「もしかすると、お前が七人目のマスターだったかもしねえな。だとしてもこれで終いだ」

青タイトの男は一瞬で土蔵にやって来て、右手に持っている赤い槍を青年に突き付ける。

「じゃあな坊主。今度は迷うなよ……」

死ぬ…俺は死ぬのか…俺はまだ何も出来ていない…フザケルナ…俺はまだ正義の味方になれていない…俺はこんな所で死ぬわけにはいかない!!



俺は迫りくる赤い槍を見つめながらそう、強く願う。すると、俺の下から強烈な光が発生する。

「な、なんだこりゃ！」

青タイトの男は一瞬、槍の速度を緩め。次の瞬間、金属音大きく響いた。青年はおそろおそろ目を開けると目の前に二人の女性が立っていた。

二人は金髪、その内の一人は白い服の上から甲冑を着ている。もう一人は冬なのに露出が高い服、特にミニスカが今にも見えそうでは少し赤面していた。

「ちっ、七人目かよ…」

青タイトの男は後ろに下がり土蔵から出て行く。そして、甲冑を着た女性が俺の方を向き。

「問おう、貴方が私のマスターか？」

俺はその美しすぎる女性…少女に目を奪われていた。それはたった今、命を狙われた事でさえ忘れてしまうほどだった。

「サーヴァント、セイバー。召喚に応じて参上した…ところで貴方は何者だ？」

セイバーは隣にいる女性に問いただす。その女性もセイバーとは違う金髪を長く伸ばしていて、身長も女性の平均的な感じから高い方の背丈にすらつと長い綺麗な足、体型も出る所は出て引っこむ所は引っこんでいて女性のがれの様な体型をしている。特に印象的なのは、その女性の雰因気が出る女性と言うイメージを持ってまたしても俺はその女性に目を奪われてしまう。

「ふむ。こう言うときは私も名乗った方がいいのだろう。私はミラ・マクスウェルだ。私も一応セイバーとしてこちらに来てしまった身だ。呼ぶ時はミラで構わない」

「なっ、あなたもサーヴァントなの…」

「どつやら、のんびりおしゃべりをしている暇は無いようだ」

ミラと呼ぶ女性は土蔵の外を見るとそこには槍を構えている青タイツの男の姿があった。

「ちっ…いったいどうなってやがる。何故セイバーが二人も居るんだ？」

「さあな。だがお前は私の前で武器を構える。なら敵ということだ

な」

「そつだ、ぜ！！」

青タイトの男の槍がミラに襲いかかるが、ミラは腰に掛けてある剣で槍を全て捌く。その動き一つ一つ無駄が無く、一連の動きが美しすぎる位だった。

「セイバーの名前は伊達じゃねえか。なら……」

青タイトの男は赤い槍を下段に構え、目つきを一段と鋭くさせ、途轍もない殺気を放つ。その殺気は常人の人間が直に受けたら即、失神するものだろう。少し離れている俺でも気を確かにしていないとヤバいのだからな。

「宝具を使用するつもりです！！」

セイバーが青タイトの男のやろうとした事をいち早く分かり、ミラに警告する。

「ふむ、確かにあれは厄介そつだな」

ミラは行動を止める為に青タイトスの男に斬りかかるが、やや男の方が早いようだった。

「おせエ…死棘の…」

青タイトスの男は次のアクションを起こしていた、そこで間にあわないと感じたミラはとっさに剣を地面に刺して…

「グレイブ」

「なっ!!」

青タイトスの男の真下から地面が盛り上がり、青タイトスの男は空中に放り出された。それより何故、地面が盛り上がったんだ？

俺はその事を疑問に思いながら上空に打ちあげられた男を見る。

「ハアアア!!」

その隙を逃すまいとセイバー空中に跳び、青タイトスの男に斬りかかる。男も何とか空中で体勢を取るとセイバーの攻撃を槍で捌いて地面に着地する。

「あなたの槍捌き、ランサーのサーヴァントですね。しかも赤い槍ゲイ・ボルグに死棘の槍と言う事は…」

「ちっ…まさか宝具を発動出来ず、更に正体を知られちゃった。だが、二人のセイバー。これは中々面白い展開になって来たんじゃないかね。最初はハズレくじを引いたと思ったがこれはこれについてるかも知れえ」

青タイトスの男…ランサーは何処か嬉しそうな表情で言う。そしてランサーは二人から背を向けた。

「逃げると言うのですか!?!」

「マスターの指示って言うのもあるが、今は完全じゃねえんだなこれが。だから一旦引かせてもらっぜ」

ランサーはそう言って空高く跳びあがって行った。その後をセイバーが追おうとするが…

「よせ、今行ってももう遅い」

「くっ…」

ミラがセイバーの腕を掴んでそれを阻止させた。そして俺は戦闘が

終わった事を確認しながら二人に近付いて二人に話しかける。

「お、お前達は一体何者なんだ？」

「私達は聖杯戦争と呼ばれる戦いに参加するために召喚されたサーヴァントです」

「聖杯戦争って何だ？」

聖杯戦争、なんだそれ。そんなの聞いたことが無いぞ？

「そして、あなたもその戦に参加する一人に選ばれたのです」

「なあ！！！」

俺が驚いた事でセイバーは一から聖杯戦争について説明をしてくれる。

聖杯戦争、それは七組のマスターとサーヴァントが聖杯を掛けてお互い殺し合う事。そして、最後の二組が聖杯を手に出れると言う。そして、俺の右腕にある模様が礼呪といい、それはサーヴァントに対して三回まで行える絶対命令権。そして、サーヴァントのマスターで聖杯戦争参加者の証ともされているらしい。

俺はその話を聞いた時、とんでもない事に巻き込まれたと何となく  
だが感じた。

「ふむ…」

「どうかしたのですかミラ？」

「いや、私はその聖杯戦争？って言うのは初めて聞くぞ」

「なっ！！では貴方は何故ここにいるのですか？」

「ああ。ここらへんから大精霊の気配を感じてな。私はその調査で  
ここにやってきた」

「「精霊？」」

ミラは夜空を見つめ何か納得したかのように頷き視線を二人に戻す。

「ふむ、なるほど。どうやらここは私がいたリーゼ・マクシアとは  
違う世界のようだ」

ミラは語る。自分が精霊の頂点的な存在マクスウェル。そして、精霊や四大精霊事等を簡単に説明する。

彼女はどうかやらこの世界の人間では無いらしい、最初は信じられなかったが精霊術と言いつのを見せて貰って信じるしかなかった。

俺は精霊とかあまりわからなかったが、それは俺が無知だからと言う事もあるが、流石に今まで普通に暮らしていた学生には理解が出来ると思うか？

「だが安心しろ、セイバーのサーヴァントとして召喚された以上、君は私が守ろう。ところで君の名何と言いつのだ」

「衛宮士郎だ」

「そうか、シロウと言いつのだな」

ミラは優しく俺の肩にポンッと手を置く。ミラの身長は俺と余り変わらなかつた為、ミラの表情が良く見える。その顔はかなり信頼できそうだった。

「むっ、外にサーヴァントの気配が!!」



すると、セイバーは家の塀を跳びこえて何処に行ってしまう。俺は改めてサーヴァントと言うのを実感させられた。

「シロウはそこで待っている。私がセイバーを探しに行く」

ミラは俺そこにいるように言うと、家の入口から外に走り出す。実際にはセイバーをすぐに見つけた、それは家の塀の近くの道路にいたのだが、セイバーは今まさに赤いコートを着た少女に斬りかかるうとしていた。

俺は急いでセイバーに攻撃をやめさせようとするが、先に出て行ったミラが間に割って入ろうとしていた。

「くっ、なぜ邪魔をするのです」

「おちつけセイバー」

赤いコートの少女が今まさに斬られようとした瞬間、ミラがギリギリその間に割り込み、剣でセイバーの攻撃を受け止めていた。

「セイバー止めるんだー!!」

「シロウ、あなたまで……」

「ふうシロウ。私はあそこで待ってると言った筈だが…はあ。君は  
どうやらジュードに似ているようだな」

セイバーは何処か納得していないような感じで、ミラは俺を見て呆  
れていた。

何故そこで俺が呆れられるんだよ？

「そろそろ剣を納めてくれるかしら？」

すると、赤いコートを着た少女がそう促し、俺はその声の主の顔を  
見て驚く。

俺が見たのは学校では優等生とし男子からの憧れの的存在の…

「お、おまえ。遠坂」

「こんばんわ衛宮君」

遠坂凜、彼女が俺の前に居たのだ。



## 第二戦・出会い（後書き）

このセイバーはリリイ仕様なので白にポニーテールです。自分、青セイバーも好きなのですが白セイバーも好きで。もう一つの小説は青セイバーなのでこっちは白セイバーにしてみました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2482y/>

---

Fate OF XILLIA

2011年11月16日00時27分発行